

平成29年度事業報告書

1. 設置経営主体 社会福祉法人 城山福祉会
2. 理事長名 豊田 亮
3. 法人事務所 熊本市西区上代6丁目9番1号
幼保連携型認定こども園城山保育園内
4. 法人設立許可年月日 昭和49年2月19日（厚生省227号）
5. 法人登記年月日 昭和49年4月1日
6. 施設の名称 城山保育園
7. 施設の所在地 熊本市上代6丁目9番1号
8. 施設の種類 幼保連携型認定こども園
9. 定員 1号認定15名、2号認定94名、3号認定86名
合計195名、実数174名
10. 施設の許可年月日 平成27年年4月1日
11. 施設長名 豊田 亮
12. 資料
 - (1) 保育教諭等の定数と現員 定数 23名、 現員 28名
 - (2) 職員と職務分担
園長：豊田亮
主幹保育教諭：豊田加奈子
保育教諭：
ひまわり組・すみれ組・ばら組：6名
たんぽぽ組：5名
なでしこ組・つぼみ組：15名
子育て支援員：2名
調理師：3名
栄養士：2名
事務員：1名

13. 運営基本方針

本園は、今年度もすべてのこどもによりよい教育・保育をとということで1年間教育・保育を行った。29年度は、昨今の保育士不足もあり、園児の申請はあるものの職員不足により園児数を受け入れることができなかった。しかし、長く勤務している職員が力を合わせ、協力して保育を行う事ができた。5月には初めての試みでもある「母親保

育」を行い、母親に園の様子を知ってもらい、保護者と職員が親睦を深められたと思う。今年度も地域の方に向けて新聞を作り、各町内で回覧して頂いた。自主事業ではあるが、一時預りも実施し、地域のニーズに合わせた保育ができるように努めた。

又、労働時間の短縮等も実施し、時差出勤や、平常日、土曜日の計2日の休日を設け実施した。

14. 保育目標

保育目標の《自ら課題を見つけ、自ら考え行動する子ども（主体的に行動する子ども）》、《やりたいことをやれる子ども（意欲的な子ども）》、《自分を好きになれる子ども（自尊感情を持てる子ども）》、《人の喜びを喜べる子ども（思いやりのある子ども）》を全職員が一丸となって取り組んできた結果、各発達年令に応じた目標におおむね近づくことが出来た。又、今年も『デイケア西部』『なすび園』、七夕に高橋稲荷神社で『三和荘』の方々との交流が出来たので今後も続けていきたい。

又、中学生、高校生、お年寄りとも交流があり、今年は、ナイストライで地元の三和中学校や飽田中学校より訪問があり、行事等を一緒にしてとても喜んだ。こういう機会をもっと増やしていけたらと思う。

子どもたちが異年齢児と交流し、子どもたちの自主性を育めるように保育に努めている。又、乳児も子ども達の発達段階を職員が把握し、個々の子ども達に合わせた、環境作りを行った。

こどもの発達を見てもらい、又、保護者の相談を行って頂いているスクールサイコロジストの野田弘一先生にも2回来園頂く予定だったが、1月に東京の大雪の為に来援してもらう事が出来なかった。この分は次年度に回してもらおう予定。保護者の面談希望も増え、子どもの発達相談等を行う事ができた。

15. 給食運営

今年も、腸管性大腸菌 O-157 の食中毒予防のため、常に清潔を心がけ、室内の清掃、調理器具の毒素、手指の消毒を精密に行なった。又、乳幼児における食事が人間形成上、極めて重要であることを認識し、綿密な年間計画とバランスのとれた献立表を作成し、実施した。

食育の一環として、完全給食を実施し、温かいご飯を食べることができるようになっている。また、園で栽培した野菜など植え、野菜の芽が出るのを見たり、実になるのを子ども達自身の眼で見て、食べれない物が食べれるようになったりし、食べ物の大切さなどを知った。

厨房内のオール電化に伴い、調理もスチームコンベクションを使い野菜本来の味を楽しむ事が出来ている。

16. 安全管理

入園児童に対する環境面での安全対策には特に配慮し、児童自らが危険に対して素早く行動できる力を日々の保育の中で身につけさせることが出来、ケガや事故等など

がなく、園生活をエンジョイすることにつとめた。又、遊んだあとの手洗い等や遊具の消毒等も綿密に行った。又、危機管理マニュアルも各方面より取り寄せ、独自のマニュアルも作成した。

防犯も総合警備をお願いし、園の開閉も必ずチャイムを鳴らして頂くようにし、不審者防止に取り組んでいる。

17. 保健衛生管理

入園児童及び、職員の健康管理には注意を払い、看護師の赤城美穂子の指導のもと、日々の登降園児に視診を行っている。また、22年度より、4.5歳児の希望者に昼食後にフッ素を行うようになっている。

また、嘱託医である三和クリニックの後藤医師、奈良歯科委員の奈良健一医師を招き、健康診断と検診を行った。

腸管出血性大腸菌 O-157、ノロウイルス等の食中毒の認識を深め、職員間の連絡を密にした。